

# 観 音 寺 日

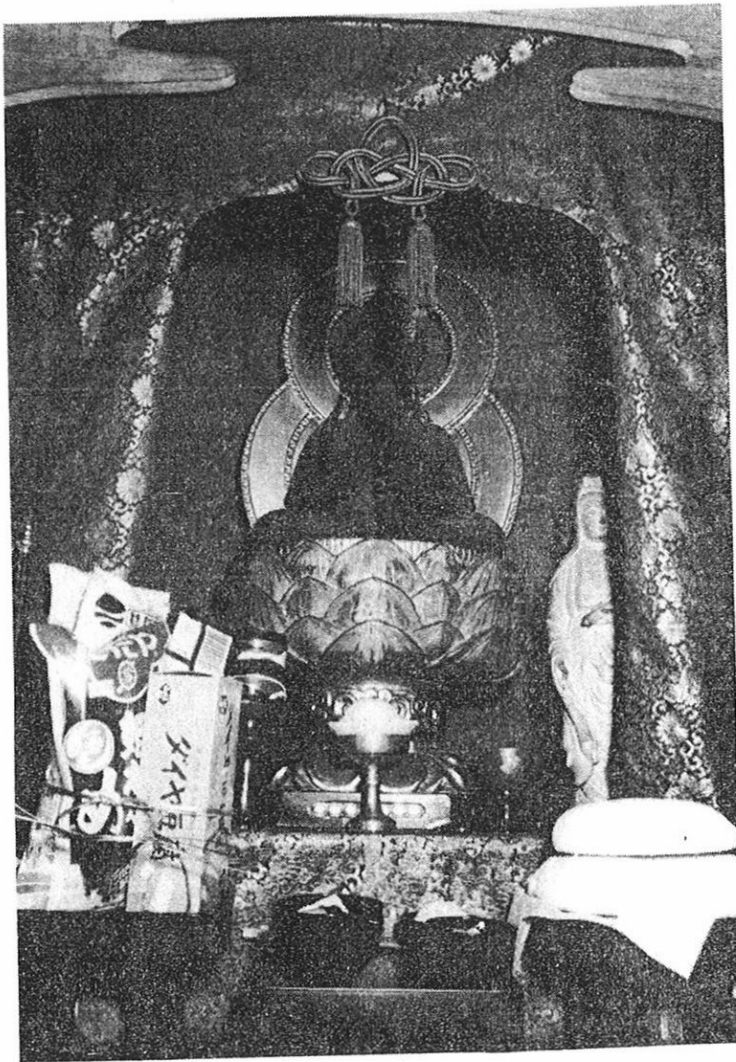
昭和60年1月

第2号

年2回発行

編集発行

小出真行



聖  
観  
世  
音  
菩  
薩



南無大師 和顔愛語でおがみあい  
いつもわが身は あびらうんけん

正観寺御詠歌



あけまして  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

私達は毎歳新年に当って、この様な言葉をもつて挨拶を交しています。元旦になって、無事初日の出を拜めるということはまことに有難くめでたいことなのです。

「めでたい」という言葉は、万事がよい方向に向いているときやうまく行ったときに使います。さて、「めでたい」ということにはどんな味わいがあるでしょう。愛する、珍らしい、美しい、結構なこと、おいしいこと、優れていること、祝うべきこと、賀すべきことなどの意味に使われています。

そうしますと私達は、すぐる一年を無事に過ごしてここに新春を迎えるということは、愛すべきこと、珍しいことです。おめでたいというのがどうやら本当のようです。

# 「般若心経」について

(一)

さて、「般若心経」は普通「心経」と呼ばれているもので、わたしたちがいつも誦えています。お経の中で最も親しみ深いお経の一つであります。このお経には漢訳されたものに七本あり、その他に梵本、チベット訳、蒙古訳などがあります。そして、内容的にみますと広本と略本との二種類があり、中国で古く「経録」というお経の目録がつけられてあります。それをみますとかって漢訳に十二本の異訳があったようですが、いずれにしてもこのように多くの訳があります。この「心経」が昔から、多くの人々の心の支えになり広がったことを物語っているといえましょう。さて、現在残っている漢訳七本のうち、日常わたしたちが用いているものは、玄奘三蔵の訳したもので漢字の字数にして二百六十二字で、たくさんのお経の中で最も短かいほうに属するでしょう。中国の昔の高僧で賢首大師や、慈恩大師などの説によると、この「心経」は「大般若経」六百巻の要とするところをとったものとされています。事実六百巻中の習応品や観照品の一部によく似た同じ文が見られます。

日常用いていますところの「心経」の題は「仏説摩訶般若波羅密多心経」となっていますが、仏説とは文字通り仏の説かれたということ、この仏とはお釈迦さまのこと、「摩訶」とは梵語「マハー」の音訳で、大きいとか全ての意味で、わが国の仏教は大乗仏教といわれ、梵語で「マハーナ」すなわち「大きな乗りもの」の仏教ということであり、そこには全ての人々を救いとするという願いがこめられています。

「般若」とは、つい般若の面を想い出すほど、わたしたちになじみの深い語であります。が、元来、梵語「プラジニヤー」の音訳で「智慧」とか「真理」を意味し、この智慧とは、わたしたちが世のありさまを自分勝手に解釈したものではなく、いつでもどこでも誰にでもあてはまる普遍妥当な真理を体得する能力で広く、深く、柔かな心をもった時にえられるというのです。真理は永遠に古くして、かつ新しく、絶えず創造し活動してやまないものなのです。

仏教では世のありさまを実相と観照の二面から見究めますが、実相とは真理の容体であり、真実体であるのです。そして観照とは真理の主体であり、智慧なのです。この眺められるものと眺めるものが一体となった状態が「般若」であり、世のありさまの真実体（本当の姿）を見究める目といってさしつかえありません。この目で真実体をよく見究めると、世の中にはどこにも無駄や、つまらないものがなく、それぞれが精一杯生きていくことに気がつきます。それをつまらないものとみるのは、眺める人間の料簡が狭く、色メガネで

真実体を見ているからに他ならないのです。「波羅密多」とは梵語の「パーミタター」の音訳で「彼岸に至る」という意味で、彼岸といえます。わたしたちは毎年春秋の二回おとずれるお彼岸のことを連想いたしますが、「今日彼岸さとの種を蒔く日かな」という歌が示すように、迷えるわたしたちの不自由な世界から、自由で真実な理想の世界に至る実践の道を指しています。具体的には布施（ほどこし）持戒（いましめ）忍辱（たえる）精進（はげむ）禅定（やすらぎ）智慧（よく生きる）の六波羅密を実践することというのです。

「心経」の「心」とは「真髓」とか「核心」とか「中心」といように肝腎要めの芯で、英語でいうならば「エッセンス」にあたり、「経」とは梵語の「ストトラ」を漢訳した「タテ糸」ということで「真理をつらぬく教え」を意味しています。

従って「仏説摩訶般若波羅密多心経」とはお釈迦さまが、世のあるがままの姿を知り、ひとしくあるべき姿になれる実践方法を説いた肝腎要めの教えということになります。

それでは、これから少しづつ、この「般若心経」の内容についてひとといていく事にしましょう。

観自在菩薩行深般若波羅密多時  
照見五蘊皆空度一切苦厄

(観自在菩薩、深般若波羅密多を行ずるの時五蘊 皆空なりと照見して一切の苦厄を度したまう。)と最初にありますが、

「観自在菩薩」は普通「観音さま」と親しまれ、仏の慈悲を人格化し、世間の人々から観られつつ、そうした人々を観て救う存在だといわれています。この「観」とはわたしたちの眼で世の中の現象を見るのではないのです。仏教ではもの見方に五つの眼があり、

第一は肉眼で「ここに鉛筆がある」とか「あそこに美人がいる」という形あるものを自分の眼で眺める見方であり、

第二の天眼は「この鉛筆は丸い」とか「あの美人は色白だな」というように分析的なものの見方であり。

第三の慧眼は「鉛筆にしては使いづらいな」とか「美人としてはツンとすましているな」と主観的に相手の価値を判断する見方であり、

第四の法眼は「私は鉛筆であるが、使ってくれて有難いな」とか「私は普通の人間なのに」「美人に見立ててくれてうれしい」という相手の気持をくみ取れる見方であり、

第五の仏眼では相手と自分の気持が感応道交して、目に見えないものが見えてきて、お互いが喜び合う見方であります。

このうちで最後の仏眼でものを見ることを「観」といい、そういう見方の出来る人を「観音さま」というのです。

「菩薩」とは「菩提薩埵」を省略したもの

で「さとりを求める人」を指し、世の中の真実体(本当の姿)を見究めようと絶えず努力する求道者のことなのです。

「五蘊」とは「五つの集まり」ということで、世の中の一切の存在が色(形のある物質的現象、つまり目に見える全てのもの)と受と想と行と識という四つの人間の精神作用から構成され、「受」とは「そこにものがあるな」という感覚でさきほどの肉眼にあたり、「想」とはその対象を分析的に知る感覚で天眼にあたります。「行」とは特定の対象に興味を抱く感覚で慧眼にあたり、「識」とは私達の全ての感覚器官を動員して対象を認眼する感覚で法眼にあたるのです。

「空」とは、形あるものとして存在しない状態を指し、物質的な存在は絶えずお互いに関係し合って変化し、目に見える現象として存在しても実体としてつかまえることが出来ないものですから「ない」ともいえます。例えば、エネルギーや愛というものには実体がありません。「ここにそれを見せて下さい」といわれても「ハイ、これがそれです」と見せることが出来ません。しかし、見せられないからといっても存在しないと断定は出来ませんので、従って「空っぽ」ということにはならないのです。昔の禪者が「無一物中無尽蔵」といい、また、数学者の面からいうと「ゼロは無限大に等しい」とあります。そのゼロが空であり、無限大の全体でもあるのです

から、物質的存在をなりたせたる受け皿といってもさしつかえありません。

「照見」とは、ちよつど月の光が分けへだてなく、すみずみまでくまなく照らすように、物事ははっきり見えることを言います。

「一切の苦厄を度す」とは、一切の苦しみから救われることで、精神的な苦しみや悩みがなくなるのではなく、たとえあつたとしてもそれにとらわれず、例えばちよつど酒をのんでも酒にのまれないような境地になることをさすのです。

従って要約しますと、般若の智慧はありとあらゆるものがみな「空」であると見透す智慧ですから、観世音菩薩に託して説かれているのです。観世音菩薩すなわち観音さまは、全ての人々の苦悩をとり除き楽を与える慈悲の菩薩であります。その慈悲は智慧の働きによるものなのです。

この観世音菩薩が般若の智慧を実現するとき、ありとあらゆる存在の構成要素(五蘊)は空であると認知されたのです。(空というのは、何もないとか、からっぽだというのはありません。恒常不変の本質的存在ではないといった意味なのです。)そして、「一切の苦厄を度したもう」とは、観世音菩薩の救世の智慧の働きをたくみにいい表わしたものであるから、全ての人々に救いの手をさしのべているということなのです。

「お大師さまのことば」(2)

仏は、忍辱の鎧

精神の甲を以て馬に乗り

定の弓、慧の箭を以て

外には魔王の軍を摧き

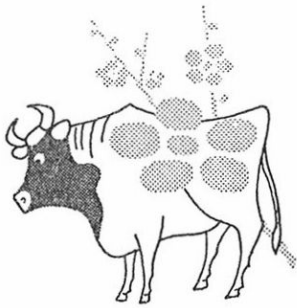
内には煩惱の賊を滅す

故に仏と称するなり



(大日経開題より)

これは、仏は何ものにも堪え忍ぶということ  
とを鎧とし、一步も退かぬ精進を甲とし、行  
いを厳正にする戒律を以て乗りものにし、禪  
定の修行を弓とし、永年の練磨に築きあげた  
真理をさとする智慧を矢にして、外に向つては  
しばしば襲う誘惑の大悪魔を激退し、内に向  
つては心のまよいを打ち亡す方であり、故に  
仏というのです。



「絆」

(二)



現代は男女同権といいますが、それは人間  
として平等に取り扱われるということ、同  
権と同職とを混同して、男性と女性とがみな  
同じことという意味ではありません。何故か  
といいますと、男性と女性とは根本的に生理  
機関の構造が違っていますし、智能や感情の  
働きかたも違った点があるのですから、家庭  
における仕事の役割分担も当然違ってこなけ  
ればなりません。

この同権とは男性は男性の天分をのぼし、  
女性は女性の天分をのぼすところにあり、そ  
れは男性と女性とがそれぞれ違った天分をも  
っているのです。哲学者のカントが「男だけ  
でも不完全、女だけでも不完全、男と女とで  
完全な人間が出来る。両性は互いに相手を補  
充し合っている。」といっています。

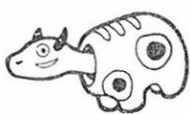
本質のうえからいえば女性も男性も人間に  
違いはなく平等なものです。現象のうえでは  
女性の体と男性の体との区別があり、その  
男性と女性が一体となるのが結婚であり、そ  
こには完全な人間生活が形づくられ、新しい  
生命として子供が生まれ、その子が一人前に育  
てあげられていく家庭があるのです。この精  
神を生活の上に活かしていきますと、夫婦の  
間にはお互いに尊敬と愛情と信頼の感情が湧  
いてくるのです。毎月一諸に暮らしています  
と、お互いに相手の欠点が目につくものです

が、どんな男性でも どんな女性でも欠点の  
ない人間は誰れもありませんから、お互いに  
その欠点を補いあってゆくことが一番肝心な  
のです。また欠点ばかりの人間はいません。  
誰でも何かの美点や長所をもっているもので  
すから、その相手のもっている良いところに  
目をつけ、それを伸ばしてあげられる配慮と  
工夫が大切なのです。

今地球上はおよそ十五億の男性と十五億の  
女性とが住んでいます。それほど多い中から  
たった一人の女性と、たった一人の男性が偕  
老同穴を契るにいたったのは、いろいろな事  
情があり、そうならなければならなかった原  
因があるので、それを因縁と受けとつ  
てその因縁を活かすように日々を努力精進す  
ることが幸福への道であると信じてやみませ  
ん。

人として自分を一番支えて理解してくれ、  
自分が一番支えになって理解してあげなくて  
はならないのが夫婦だと私は思います。そし  
て常に「人」という文字を頭におきお互い相  
支えつつ進歩したいものです。

編集後記



皆様方の御希望により、今回各から日頃皆  
様がお誦えしています。「般若心経」につい  
て除々にひもといていきたいと思います。